

## 中国人日本語学習者における二字漢語動詞の誤用

李恵・首都大学東京大学院生

### 研究目的

本研究は中国人学習者の日本語作文における日中両言語の二字漢語動詞を取り上げ、学習者にアンケート調査を行ない、誤用の傾向を考察した。日中それぞれの用法を比較し、辞書と教科書による誤用の原因を分析した。日本語教育現場では、本研究における四つの種類の角度からカテゴリ意識を持ち、文脈により、よりよい効果的な指導を行う必要があると考えられる。

### 1. 研究背景

日本語には「発展する・注意する・生活する」というような中国語と同じ語形の二字漢語動詞が多くある。語形からみると中国語の語彙と同じであるのに、品詞性及び意味用法などの面で、中国語とずれがある場合もある。中国人日本語学習者にとって、二字漢語動詞は母語干渉を誘発するので、習得が困難で、誤用が生じやすいと言われている。

### 2. 研究方法

本研究は、李(2012)における学習者の作文から出てきた二字の漢語サ変動詞を取り上げ、学習者の誤用の傾向を探り、誤用の原因を分析した。李(2012)から抽出した文を選択と穴埋めの問題文を作成し、分類ごとに五つの問題文を設定した。分類にあたる問題文が足りない場合、候(2002)、河住(2005)、庵(2008)から出た例文を参照した。中国国内の学習者にアンケート調査を行った。(1)品詞性及び自他動詞に関する誤用では、「中国語では形容詞あるいは副詞であるが、日本語では動詞である」は「(1)-A」とし、「中国語では他動詞であるが、日本語では自動詞である」は(1)-Bとし、「中国語では動詞として自他両用ができるが、日本語では自動詞の用法しかない」(1)-Cとする。(2)意味用法に関する誤用では、類義語は(2)-Aとし、異義語は(2)-Bとする。(3)活用語尾と共起性に関する誤用では、活用語尾は(3)-Aとし、共起性は(3)-Bとする。(4)助詞に関する誤用。

調査対象は中国東北林業大学日本語専攻に在籍する大学生 113 名である。二級以上の学習者を上級学習者と見なし、二級以下の学習者を中級学習者と見なす。調査時期は 2012 年 9 月、大学の第一学期である。

### 3. 結果と分析

日本語学習者における二字漢語動詞の誤用状況をさらに明らかにしたうえで、日中両言語を比較し、辞書と教科書の面から、誤用の原因を分析した。

具体的に、分類(1)に関しては、『広辞苑』は初級段階の学習者に使われた場合、品詞性の記載がないため、混乱が発生しやすい。『新明解国語辞典』ではこの部分の語彙に関しては、動詞がはっきり記載されているが、名詞の用法が例文として反映されるため、学習者は中国語の品詞性として扱う可能性があると考えられる。『日漢大辞典』では品詞性がきちんと記載されているが、例文が足りないと、学習者が日本語を使いこなすことができない場合、誤用が生じやすいと考えられる。本研究の考察からみると、(1)-A に関しては、日本語の形容詞のほか、名詞・副詞として使われている傾向も見られた。(1)-B・(1)-C に関しては、『広辞苑』・『新明解国語辞典』・『クラウン

漢日辞典』では自他動詞に関する説明がないため、学習者は中国語の自他として判断する可能性があると考えられる。『新編日本語』という教科書は品詞性と自他動詞の表記があるが、学習者にとって導入された例文を見ると、自他動詞の判断ができないことがわかった。学習者は辞書での中国語に頼り、品詞性の異同を考えず、母語の用法と同じく使用する傾向がわかった。

分類(2)に関しては、類義語では、日中両言語の表す意味にずれがある場合と日中両言語共に紛らわしい表現の場合と日本語の単語を勝手に中国語訳で、使われている場合に誤用が見られる。異義語に関する誤用原因は、母語干渉による誤用と日中両言語の意味はまったくちがうものと、辞書の影響を受けるものと学習者の言語習慣と一般常識により誤用するものである。

分類(3)に関しては、活用語尾では、ボイスや待遇表現に関わるものが多い。日本語では主語の省略があるので、母語の干渉で主語の混乱に関する誤用と、学習者が「する」の変形「される」と「られる」を混同したということが考えられる。また、学習者は文を作成する際、活用するべき場合に、活用せずに辞書形を使う傾向があるため、誤用が発生しやすい理由の一つと考えられる。共起性による誤用の原因は、アスペクト・テンスによる「する」の形を単純化することである。

分類(4)に関しては、辞書・教科書と母語の影響で、誤用が発生することがわかった一方、助詞の使い分けのほか、品詞性や文の構成などを無視するのが原因の一つだと考えられる。

要するに、誤用の原因については、学習者は日中両言語のずれを無視し、母語の干渉で、母語の使い方として使用していることが多かった。辞書や教科書の用例と記述が不足していることも大きな要因であることがわかった。また、学習者の言語習慣や日本語だけでなく、母語に対しての認識不足も誤用原因の一つであると考えられる。

#### 4. 日本語教育の観点からの提言

日本語教育を行う際に、単に日本語を中国語に翻訳して教えると、学習者が母語の干渉や辞書・教科書の不十分で、誤用が生じやすいと考えられる。学習者における二字漢語動詞の誤用をできるだけ減らすために、日本語と中国語両言語を比較しながら説明したほうがよいと思われる。学習者は日中辞書による日本語を母語に翻訳したものに頼る傾向が見られたため、辞書や教科書などの不十分なところを学習者に指摘することが必要であると考えられる。また、本研究は分析のために、四種類を分類したが、単に一つの誤用に着眼するのではなく、全面的に四つの種類の誤用に注意しなければならない。単に単語を教えるのではなく、本研究における四つの種類の角度からカテゴリー意識を持ち、文脈により、よりよい効果的な指導を行う必要がある。

#### 5. 参考文献

庵 功雄 (2008) 「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学センター紀要』第 11 号 pp. 47-63

張麟声 (2009) 「日中両語の自他動詞の対照研究」第 12 回中国語話者のための日本語教育研究会 pp. 12-45

文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語—日本語教育研究資料』大蔵省印刷

李恵 (2012) 「中国人学習者による日本語作文における二字漢語動詞の誤用について」『日本語研究』第 32 号首都大学東京 pp. 117-129